2018/5/14～10/1、10/8～10、2019/6/28、11/20、12/4～2020/1/24⇒経過日数 620 日

ホツマツタヱ講座

ホツマツタヱ　６アヤ（紋）　　解説文

ホツマツタヱ研究家　吉田六雄

６アヤ（紋）【件名】

[illegible]	ホツマツタヱ　ミハタノム	ホツマツタヱ御旗の六
[illegible]	ヒノカミソフキサキノアヤ	日の神十二妃のアヤ（綾）

ホツマツタヱ本文

６アヤ（紋）１（1 行）～３６（3 行）【本文】

	ヲシテ		カナ文字		現在訳	
1	[illegible]	[illegible]	フソヒスス	モモフソムヱダ	二十一鈴	百二十六枝
	[illegible]	[illegible]	トシサナト	ヤヨイツイタチ	年サナト	弥生朔日
	[illegible]	[illegible]	ヒノヤマト	ニイミヤツクリ	日のヤマト	新い宮造り
	[illegible]	[illegible]	アメミコハ	ヒタカミヨリゾ	天御子は	日高見よりぞ
	[illegible]	[illegible]	ウツリマス	フタカミヱメオ	移ります	二神ゑ妃お
	[illegible]	[illegible]	ミコトノリ	カンミムスヒノ	勅り	カンミムスヒの
	[illegible]	[illegible]	ヤソギネガ	モロトハカリテ	八十杵が	諸と議りて
3	[illegible]	[illegible]	クラキネガ	マスヒメモチコ	クラキネが	益姫モチコ
	[illegible]	[illegible]	ネノスケト	ソノトメハヤコ	北の典待と	その妹女ハヤコ
	[illegible]	[illegible]	コマスヒメ	ネノウチキサキ	小益姫	北の内待妃
	[illegible]	[illegible]	ヤソキネノ	オオミヤミチコ	八十杵の	大宮（姫）ミチコ
	[illegible]	[illegible]	キノスケニ	タナハタコタヱ	東の典待と	棚機（姫）コタヱ
	[illegible]	[illegible]	キノウチメ	サクラウチガメ	東の内待	サクラウチが女
	[illegible]	[illegible]	サクナタリ	セオリツホノコ	サクナタリ	瀬織津ホノコ
	[illegible]	[illegible]	サノスケニ	ワカヒメハナコ	南の典待と	若姫ハナコ
5	[illegible]	[illegible]	サノウチメ	カナサキガメノ	南の内待	カナサキが女の
	[illegible]	[illegible]	ハヤアキツ	アキコハシホノ	速開津（姫）	アキコは潮の
	[illegible]	[illegible]	ヤオアイコ	ツノスケウチハ	八百アイコ	西の典待、内待は
	[illegible]	[illegible]	ムナカタガ	オリハタオサコ	宗像が	織機（姫）オサコ
	[illegible]	[illegible]	オシモメハ	トヨヒメアヤコ	御裳待は	豊姫アヤコ
	[illegible]	[illegible]	カスヤガメ	イロノヱアサコ	粕谷が女	イロノヱ・アサコ
	[illegible]	[illegible]	サノオシモ	カダガアヂコハ	南の御裳待	荷田がアヂコは
	[illegible]	[illegible]	ネノオシモ	ツクバハヤマガ	北の御裳待	筑波ハヤマが
7	[illegible]	[illegible]	ソガヒメハ	キノオシモゾト	ソガ姫は	東の御裳待ぞと
	[illegible]	[illegible]	ツキニヨセ	ミコハアマヒノ	月に寄せ	御子は天日の
	[illegible]	[illegible]	クラキノル	ヒノヤマノナモ	位宣る	日の山の名も
	[illegible]	[illegible]	オオヤマゾ	カレオオヤマト	大山ぞ	故大ヤマト
	[illegible]	[illegible]	ヒタカミノ	ヤスクニノミヤ	日高見の	安国の宮

			キツサネノ	ツホネハカワリ	東西南北の	局は替り
			ミヤツカヱ	ソノナカヒトリ	宮仕ゑ	その中一人
			スナオナル	セオリツヒメノ	素直なる	瀬織津姫の
9			ミヤビニハ	キミモキサハシ	雅には	君も階（段）
			フミオリテ	アマサガルヒニ	踏み降りて	天下る日の
			ムカツヒメ	ツイニイレマス	ムカツ姫	遂に入れます
			ウチミヤニ	カナヤマヒコガ	中宮に	金山彦が
			ウリフヒメ	ナガコオスケニ	ウリフ姫	ナガコお典待に
			ソナヱシム	ミナハタオリテ	備ゑしむ	みな機織りて
			ミサホタツ	コレオコヨミノ	操立つ	これお暦の
			ウリフツキ	オトツキヨミハ	閏月	弟ツキヨミは
１１			ヒニツキテ	タミノマツリオ	日に次ぎて	民の政りお
			タスケシム	イヨノフタナノ	扶けしむ	伊予の二名の
			ヲサマラデ	ツキヨミヤレハ	治まらで	月読やは
			イフキアケ	トノミヤニタス	イフキあげ	外の宮に治す
			チタルクニ	マスヒトコクミ	千足国	益人コクミ
			オコタレハ	タマキネツゲテ	怠れは	タマキネ告げて
			ヒタカミハ	ヤソキネニタス	日高見は	八十杵に治す
			タマキネオ	キミノタスケト	タマキネお	君の扶けと
１３			タマキネハ	ユキテサホコノ	タマキネは	行きて細矛の
			クニオタス	ミヤツノミヤゾ	国お治す	宮津の宮ぞ
			ツキスミハ	シマツヒコヨリ	月隅は	シマツヒコより
			ナナヨスム	イマカナサキノ	七代住む	今カナサキの
			ヱタカバネ	ムナカタアツミ	支性	ムナカタ、アツミ
			タスケシム	ミヨモユタカニ	扶けしむ	御代も豊かに
			ヲサマリテ	ヤヨロトシヘテ	治まりて	八万年経て
			フソフスス	ヰモヰヱハツニ	二十二鈴	五百五枝初に
１５			ミヤツヨリ	ハヤキジトベハ	宮津より	急使飛べば
			アマヒカミ	イソギマナヰニ	天日神	急ぎ真名井に
			ミユキナル	トキニタマキネ	御幸なる	時にタマキネ
			アヒカタリ	ムカシミチノク	相語り	昔道奥
			ツクサネハ	ココニマツトテ	尽くさねは	ここに待つとて
			サツケマシ	モロカンタチモ	授けまし	諸神達も
			シカトキケ	キミハイクヨノ	しかと聞け	君は幾代の
			ミオヤノリ	コレトコタチノ	御祖なり	これ（国）常立の
１７			コトノリト	ホラオトサシテ	勅りと	洞お閉ざして
			カクレマス	ソノウエニタツ	隠れます	その上に建つ
			アサヒカミ	キミネンゴロニ	朝日神	君ねんごろに

			マツリシテ	ノチカエマサン	祀りして	のち帰まさん
			ミテクルマ	トトムルタミオ	御手車	留むる民お
			アワレミテ	ミツカラマツリ	憐れみて	自ら政り
			キコシメス	オモムキツケル	聞こしめす	趣告げる
			キギスニテ	ムカツヒメヨリ	使者にて	ムカツ姫より
１９			コトノリシ	タカミニマツル	勅りし	（日）高見に祀る
			トヨケカミ	モチコノスケト	トヨケ神	モチコの典待と
			ハヤコウチ	アチコトミタリ	ハヤコ内待	アチコと三人
			ハヤユキテ	マナヰノハラノ	早行きて	真名井の原の
			ミヤツカヱ	コトノリアレハ	宮仕ゑ	勅りあれは
			カトテシテ	ミヤツノミヤニ	門出して	宮津の宮に
			アルトキニ	キミノミカリニ	在る時に	君の御狩に
			チタルクニ	ミチオサタメテ	千足国	道お定めて
２１			ヲサムノチ	ヤソキネノオト	治む後	八十杵の弟
			カンサヒオ	マスヒトトナシ	カンサヒお	益人となし
			マタオトゴ	ツハモノヌシト	また弟子	ツハモノヌシと
			コクミソエ	ツホネトトメテ	コクミ副え	局留めて
			カエラント	コソヨリムカフ	帰らんと	去年より向かふ
			ソサノオト	アマノミチネト	ソサノオと	アマノミチネと
			カドデナス	ネナトヤヨイノ	門出なす	ネナト弥生の
			モチヨリゾ	ウツキノモチニ	望よりぞ	ウ（４）月の望に
２３			カエリマス	ヒノハヤヒコニ	帰ります	ヒノハヤヒコに
			ミコトノリ	ナンヂクニヱオ	勅り	汝国絵お
			ウツスベシ	ヤマトメクリテ	写すべし	ヤマト巡りて
			ミナヱガク	キミハミヤコオ	みな描く	君は都お
			ウツサント	オモイカネシテ	遷さんと	オモイカネして
			ツクラシム	ナリテイサワニ	造らしむ	成りて伊雑に
			ミヤウツシ	ココニイマセハ	宮遷し	ここに居ませは
			ムカツヒメ	フヂオカアナノ	ムカツ姫	藤岡穴の
２５			オシホヰニ	ウブヤノミミニ	忍穂井に	産屋のミミに
			アレマセル	ヲシホミノミコ	生れませる	ヲシホミの皇子
			オシヒトト	イミナオフレテ	オシヒトと	イミ名お触れて
			カミアリノ	モチヰタマヱハ	神在りの	餅飯賜えは
			タミウタフ	サキニモチコガ	民歌ふ	先にモチコが
			ウムミコハ	ホヒノミコトノ	生む皇子は	ホヒノミコトの
			タナヒトゾ	ハヤコガミツゴ	タナヒトぞ	ハヤコが三つ子
			ヒハタケコ	オキツシマヒメ	一はタケコ	沖つ島姫
２７			フハタキコ	ヱツノシマヒメ	二はタキコ	江の島姫

			ミハタナゴ	イチキシマヒメ	三はタナゴ	市杵島姫
			シカルノチ	アキコガウメル	然るのち	アキコが生める
			タタギネハ	アマツヒコネゾ	タタギネは	アマツヒコネぞ
			シカルノチ	ミチコガウメル	然るのち	ミチコが生める
			バラギネハ	イキツヒコネゾ	バラギネは	イキツヒコネぞ
			トヨヒメハ	ネノウチメニテ	豊姫は	北の内待にて
			ヌカタダノ	クマノクシヒゾ	ヌカタタの	クマノクシヒぞ
29			ミコスベテ	ヰオトミメナリ	皇子すべて	五男と三女なり
			サノトノニ	タチバナウヱテ	南の殿に	タチバナ植ゑて
			カグノミヤ	キニサクラウヱ	香久の宮	東に桜植ゑ
			ウオチミヤ	ミツカラマツリ	大内宮	自ら政り
			キコシメス	アマネクタミモ	聞こし召す	あまねく民も
			ユタカナリ	ツキヨミノツマ	豊かなり	月読の妻
			イヨツヒメ	ウムモチタカハ	伊予つ姫	生むモチタカは
			イフキヌシ	サキニタラチオ	イフキヌシ	先にタラチお
31			ハナキネハ	ネノクニサホコ	ハナキネは	ネの国、細矛
			シラスベシ	イマダヒルコト	治らすべし	未だヒルコと
			ミクマノノ	トミガタスケテ	三熊野の	臣が扶けて
			ノチノキミ	ナチノワカミコ	後の君	那智の若王子
			ヌカタタヨ	イサナミマツル	ヌカタタよ	イサナミ祀る
			クマノカミ	シコメガシヰオ	熊野神	醜女がシヰお
			カラスカミ	マツレハクロキ	枯らす神	祀れは黒き
			トリムレテ	カラストナツク	鳥群れて	烏と名付く
33			イサナギハ	アツシレタマフ	イサナギは	篤しれ給ふ
			ココオモテ	アワチノミヤニ	ここおもて	淡路の宮に
			カクレマス	コトハオワレト	隠れます	事は終われと
			イキオヒハ	アメニノホリテ	勢ひは	天に昇りて
			オオカヱス	アヒワカミヤニ	魂お返す	天日若宮に
			トトマリテ	ヤミオタシマス	留まりて	闇お治します
			タガノカミ	ヤマトヤスミヤ	多賀の神	ヤマト安宮
			ヒキウツシ	アメヤスガワノ	引き遷し	天安河の
35			ヒルコヒメ	ミコオシヒトオ	ヒルコ姫	皇子オシヒトお
			ヒタシマス	ネトサホコクニ	養します	ネと細矛国
			カネヲサム	シタテルヒメト	兼ねて治む	下照姫と
			アチヒコト	イセオムスヒテ	アチヒコと	伊勢を結ひて
			モロトモニ	ココニヲサメテ	諸共に	ここに治めて
			ウムミコハ	イムナシツヒコ	生む御子は	イム名シツヒコ
			タチカラオカナ		タチカラオかな	

ホツマツタヱ解説

６アヤ（紋）１（2 行）～２（2 行）【本文】

	ヲシテ		カナ文字		現在訳	
1			フソヒスス	モモフソムヱダ	二十一鈴	百二十六枝
			トシサナト	ヤヨイツイタチ	年サナト	弥生朔日
			ヒノヤマト	ニイミヤツクリ	日のヤマト	新い宮造り
			アメミコハ	ヒタカミヨリゾ	天御子は	日高見よりぞ
			ウツリマス		移ります	

語句の解説

・六万穂

マサカキの一代の年代とホツマツタヱは記述している。

・植え継ぎは　二十一の鈴の　年すでに　百二十万七千五百二十

計算すると、20.12533333 穂となり、21 鈴と一致しない。このことは、最初は、1 穂からでなく、1 鈴 1 穂より始ったことを意味する。

・二十一鈴　百二十六枝　年サナト（58）弥生朔日

この鈴枝穂は「日のヤマト　新い宮造り　天御子は　日高見よりぞ　移ります」の時のものであり、大きい暦数字に換算すると、百二十万七千六百十八穂になります。また、遡って、アマテル神が生まれられた時の鈴枝穂は「二十一鈴　百二十五枝　年キシヱ(31)　初日ほのぼの　いつる時　ともに生れます」になります。

【疑問】

アマテル神は、日高見で三十穂に渡り道を学ばたと記述されておりますが、太陽暦で何年くらいになるでしょうか。

【疑問に応える】

アマテル神は、日高見のトヨケ神の元で三十穂に渡りアマカミ（天神）の道を学ばれて、その後大日山（富士山）の天の原に帰られたられたとの記述あります。そうすると、アマテル神か日高見に出かけられたのが５７歳になり、戻られたのが８７穂になります。だが、８７穂と云う年齢は、昨今ではお爺さんにあたります。また、アマカミ（天神）の道を学ばれた期間の３０穂をアマテル神の頃の１日である１６穂で日数に換算しますと僅か１．８７５日となり、古代年の３０穂には大きな開きがあるようです。（式）３０穂÷１６穂/１日＝１．８７５日

このことから、日高見よりアマテル神が帰られた「二十一鈴　百二十六枝　年サナト（58）弥生朔日」の「二十一鈴」が誤植と考えられ、本来は「二十二鈴」と思われます。そして、誤植の「二十一鈴」を「二十二鈴」に訂正して計算して見ました。すると、現在の感覚と同じ年齢、期間が再現するようです。この再現結果より、「二十一鈴」から「二十二鈴」に読み替える必要があります。その根拠を下記に記載しました。ご覧下さい。

訂正前（オリジナル）の記述と経過年

（１）　アマテル神が生まれた時、「二十一鈴　百二十五枝　年キシヱ(31)　初日ほのぼの　いつる時　ともに生れます」

（３）　「二十一鈴　百二十六枝　年サナト(58)　弥生朔日　日のヤマト新い宮造り天御子は日高見よりぞ移ります」
（４）　（３）項と（１）項の経過年は、８７穂になります。（式）６０－３１＋５８＝８７穂

ヤマトから日高見に出発された年の求め方

先ず、訂正前（オリジナル）の日高見に出発された時の年は、上の（３）項の日高見より帰られた時の「二十一鈴　百二十六枝　年サナト(58)」より日高見で学ばれた３０穂を差し引いた「二十一鈴　百二十六枝　年サミト(28)」になります。このことから、（２）　日高見に出発された時の年は、「二十一鈴　百二十六枝　年サミト（28)」が確定されます。

誤植を訂正した時の大きい暦数字の求め方

「二十一鈴　百二十六枝　年サミト（28)」が誤植と思われるため、日高見に出発された時の訂正年（３‘）は「二十一鈴　百二十六枝　年サミト（28)」→「二十二鈴　百二十六枝　年サミト（28)」が推定されます。この時の大きい暦数字は、「１２０７５８８穂」と「１２６７５８８穂」に計算されます。この二つの差は、「二十一鈴」と「二十二鈴」の差であり、この大きい暦数字の差は、６０，０００穂になります。

訂正後の記述と経過年の新たな表示

（１‘）アマテル神が生まれた時、「二十一鈴　百二十五枝　年キシヱ(31)　初日ほのぼの　いつる時　ともに生れます」
（３‘）「二十二鈴　百二十六枝　年サナト(58)　弥生朔日　日のヤマト新い宮造り天御子は日高見よりぞ移ります」
（４‘）（３‘）項と（１‘）項の経過年は、６０，０８７穂になります。
（式）

６０，０００＋（６０－３１）＋５８＝６０，０８７穂

６０，０８７穂を８７穂の内訳５７穂と３０への比例配分

比例配分式
（式）

５７穂の換算式　　６０，０８７穂×５７穂÷８７穂＝３９３６７．３４４８２７５穂
３０穂の換算式　　６０，０８７穂×３０穂÷８７穂＝２０６３２．６５５１７２５穂

穂を太陽暦の年への換算式

（式）

５７穂の換算式　　３９３６７．３４４８２７５穂÷１６穂÷３６５．２４２２日＝約６．７３６５年
３０穂の換算式　　２０６３２．６５５１７２５穂÷１６穂÷３６５．２４２２日＝約３．５３０６年

太陽暦に是正後の年齢、期間

そして、上の年の値より、詳細に太陽暦の経過年月日、年齢を算出しますと
（１）　アマテル神が日高美へ出発された時の年齢が、５７穂→「６歳と８ヶ月」になります。
（２）　アマテル神が日高見で学ばれた期間は、３０穂→「３年６ヶ月」になります。
（３）　また、ヤマトに帰られた時の年齢は、８７穂→「１０歳と３ヶ月」に計算されます。
なお、是正前（オリジナル）と是正後の比較については、下表の「（１）アマテル神の生まれ、（２）（４）日高見に出発、

（３）（５）ヤマトに帰られた日と是正日」をご覧下さい。

そして、６歳、３年の値を昨今と比較しますと現在の小学校一年生の年齢が７歳、中学、高校の学業期間が３年である所から見て、上記の「二十一鈴　百二十六枝　年サナト(58)　弥生朔日」の二十一鈴は誤植であったことが決定します。

表（１）アマテル神の生まれ、（２）（４）日高見に出発、（３）（５）ヤマトに帰られた日と是正日

			ホツマの記述穂		ホツマ誤記入の是正年・太陽暦換算	
No,		鈴、枝、穂	２と１の差	３と２の差	４と１の差	５と４の差
1		二十一鈴　百二十五枝　年キシヱ(３１)	５７穂		６年８月２２日	
2		二十一鈴　百二十六枝　年サミト(２８)		３０穂		
	4	二十一鈴　七百八十枝　年　　(４１)				３年６月１５日
3		二十一鈴　百二十六枝　年サナト(５８)				
	5	二十二鈴　百二十六枝　年サナト(５８)				
		合計	８７穂		１０年３月６日	

そこで、誤植の個所をスス暦の全記述（五十三個所）より再度チエックしますと、前後の文脈と一致しない記述は、下行の６－１「二十一鈴　百二十六枝　年サナト（58）弥生朔日　日の大和　新宮造り」（２項）と、２８－１４「三十穂に知し」（３項）の２ヶ所になります。

スス暦の当該部前後の記述（抜粋）

４－　２４　　二十一鈴　百二十五枝　年キシヱ(31)　初日ほのぼの　アマテル生まれ
４－　３９　　天の原　十六穂居ますも　一と日とぞ
６－　　１　　二十一鈴　百二十六枝　年サナト（58）　弥生朔日　日の大和　新宮造り（２項）
６－　１０　　これを暦の　うりふ月
６－　１４　　二十二鈴　五百五枝初に
６－　２２　　ネナト弥生の　望よりぞ　ウ（卯）月の望に
８－　　１　　二十三万　二千三百八十の　二年を
８－　　２　　今年二十四の　折鈴を　二十五の鈴に　植ヱ代ヱて
２８－　１１　　二十一鈴　百二十五枝　三十一穂キシヱの　初日の出
２８－　１４　　三十穂に知し　（３項）

原文の現在訳

二十一鈴　百二十六枝　年サナト(58)　弥生朔日　日のヤマト　新い宮造り　天御子は　日高見よりぞ　移ります

解説文　　（赤文字は、原文の現在訳です。）

アマテル神は、ハラミ山の南山麓で生まれられました。時は、二十一鈴　百二十五枝　年キシヱ(31)（現在の暦に換算すると、紀元前３３０年になる）になります。長じて、アマテル神が約６歳８ヶ月になられると、イサナギは当時の都の日高見のトヨケ神の元に学業に出されました。トヨケ神の家系は、クニトコタチの頃に別れたアマカミ（天神）の家系です。そして、この頃は、アマカミ（天神）を補佐するタカミムスビの家系であり、トヨケ神は五代タカミムスビになられ

ておりました。そのため、アマテル神の幼少の天使教育には適任の家系でした。そして、約３年６ヶ月間のトヨケ神の教育も終わる二十一鈴　百二十六枝　年ササト(58)（紀元前３２０年）弥生の朔日になると、トヨケ神の日高見よりアマテル神が生まれられたハラミ山の南山麓のヤマトに帰らることになりました。ヤマトでは、幼少の頃にアマテル神がお住まいになられた日のヤマトの旧宮を新い宮に造り直しされておりました。そして、アマテル神の天御子は　日高見（宮）よりぞ　移ります。

６アヤ（紋）２（2 行）～７（4 行）【本文】

	ヲシテ	カナ文字		現在訳	
			フタカミヱメオ		二神ゑ妃お
		ミコトノリ	カンミムスヒノ	勅り	カンミムスヒの
		ヤソギネガ	モロトハカリテ	八十杵が	諸と議りて
3		クラキネガ	マスヒメモチコ	クラキネが	益姫モチコ
		ネノスケト	ソノトメハヤコ	北の典待と	その妹女ハヤコ
		コマスヒメ	ネノウチキサキ	小益姫	北の内待妃
		ヤソキネノ	オオミヤミチコ	八十杵の	大宮（姫）ミチコ
		キノスケニ	タナハタコタヱ	東の典待と	棚機（姫）コタヱ
		キノウチメ	サクラウチガメ	東の内待	サクラウチが女
		サクナタリ	セオリツホノコ	サクナタリ	瀬織津ホノコ
		サノスケニ	ワカヒメハナコ	南の典待と	若姫ハナコ
5		サノウチメ	カナサキガメノ	南の内待	カナサキが女の
		ハヤアキツ	アキコハシホノ	速開津（姫）	アキコは潮の
		ヤオアイコ	ツノスケウチハ	八百アイコ	西の典待、内待は
		ムナカタガ	オリハタオサコ	宗像が	織機（姫）オサコ
		オシモメハ	トヨヒメアヤコ	御裳待は	豊姫アヤコ
		カスヤガメ	イロノヱアサコ	粕谷が女	イロノヱ・アサコ
		サノオシモ	カダガアヂコハ	南の御裳待	荷田がアヂコは
		ネノオシモ	ツクバハヤマガ	北の御裳待	筑波ハヤマが
7		ソガヒメハ	キノオシモゾト	ソガ姫は	東の御裳待ぞと
		ツキニヨセ	ミコハアマヒノ	月に寄せ	御子は天日の
		クラキノル	ヒノヤマノナモ	位宣る	日の山の名も
		オオヤマゾ	カレオオヤマト	大山ぞ	

語句の解説（辞書）

・フタカミヱメオ（二神ヱメオ）

ヱメオは、何のことか解釈できないようです。また、用法の類似として３アヤ（綾）１２に「アナニヱヤ」があり、ここでも「ヱ」の意味が不明です。だが、大辞林 第三版では、「.あなにえや」は、（ 感 ） 〔「え」 「や」は感動の助詞〕 ほんとにまあ。あなにやし。 「 一、可愛少女えおとめを／日本書紀 神代上訓注」」と解釈している。そうす

ると、「ヱ」は感動の助詞となるようだ。個人的には、「え男」、「いい男」の感性を表したものと思っている。そして、ヱメオは、「え女お」、「いい女お」と解釈したいです。

・カンミムスビ

タカミムスビを文字のまま訳すると、「(日) 高見を結人」と解釈されます。カンミムスビは、「かんみや（神宮）を結人」と解釈され、文脈よりスメラギの添え、副の位であつたようです。そして、五代タカミムスビは「タマキネ（父）」が就任されており、カンミムスヒにはタマキネの子のヤソ杵が就任されておりました。

＜辞書＞

かむ - みや【▽神宮】、かん - みや【神宮】

神のおいでになる宮。かんみや。「皇子(みこ)の御門を―によそひまつりて」〈万・一九九〉　大辞林　第三版

【疑問】

二神は「なぜ、ワカヒト（後のアマテル神）の妃候補に十二人の妃を置かれることになったのでしょうか」

【疑問に応える】

古代日本は、天御中主、国常立、クニサツチ、トヨクンヌ、ウビチニ、ツノグイ、オモダルの順でアマカミ（天神）が引継がれて来たが、オモタルの世に「物奪ふ者の罰として斧で斬って死刑にしていたため、トミ（臣）の人心が離れたのであろうか。それともオモダルのスケ（典待）、ウチメ（内待妃）、オシモメ（御裳待）になる女がいなかったか、それともオモダルに子種が無かったのだろあすか。君であるオモダルに世継ぎ子がなくオモダルの家系は途絶えてしまったようです。（２３アヤ（綾）４～６より解釈）

２３アヤ（綾）４～６		２３アヤ（綾）４～６	
オモタルノ	タミトキスグレ	オモタルの	民利きすぐれ
モノウバフ	コレニオノモテ	物奪ふ	これに斧もて
キリヲサム	オノハキオキル	斬り治む	斧は切る
ウツワユエ	カネリニホコオ	器ゆえ	金練りに矛お
ツクラセテ	トキモノキレバ	作らせて	利者切れば
ヨツギナシ		世継ぎなし	

そのため、五代タカミムスビのトヨケ神は心配されて、二代前のウビチニの御子であり、ソアサ（四国地方）を治めていたアメヨロツ神の皇孫のイサナギを七代アマカミ（天神）に立てられて、そして「汝行き治らすべしとて、（イサナギに）瓊と矛と授け」られたのでした。天日嗣した「二神はこれお用ひて、葦原にオノコロ（天御祖神の心）お得て」中国を治めるようなられたのでした。このように途中でアマカミ（天神）の断絶を聞かされていたイサナギは、皇子のワカヒト（アマテル神）には、オモダルの二の舞を避けさせるため、東西南北の局に、スケ（典待）、ウチメ（内待妃）、オシモメ（御裳待）の十二人の妃を置かれるようになったようです。（２３アヤ（綾）７～１０より解釈）

２３アヤ（綾）７～１０　　２３アヤ（綾）７～１０

オソルルハ	ナツミドキレハ	恐るるは	無罪人斬れは
コダネタツ	ゲニツツシメヨ	子種絶つ	げに慎めよ
アメノカミ	ツキナクマツリ	天の神	よきなく政り
ツキントス	カレイザナギニ	尽きんとす	故イザナギに
ノタマフハ	トヨアシハラノ	宣ふは	豊葦原の
チ丰モアキ	ミヅホノタアリ	千五百秋	瑞穂の田あり
ナンヂユキ	シラスヘシトテ	汝行き	治らすべしとて
トトホコト	サヅケタマワル	瓊と矛と	授け賜る
トハヲシテ	ホコハサカホコ	瓊はヲシテ	矛は逆鉾
フタカミハ	コレオモチヒテ	二神は	これお用ひて
アシハラニ	オノコロオヱテ	葦原に	オノコロオ得て
ココニオリ		ここにあり	

原文の現在訳

二神ゑ妃お　勅り　カンミムスヒの　八十杵が　諸と議りて　クラキネが　益姫モチコ　北の典待と　その妹女ハヤコ　小益姫　北の内待妃　八十杵の　大宮（姫）ミチコ　東の典待と　棚機（姫）コタヱ　東の内待　サクラウチが女　サクナタリ　瀬織津ホノコ　南の典待と　若姫ハナコ　南の内待　カナサキが女の　速開津（姫）アキコは潮の　八百アイコ　西の典待、内待は　宗像が　織機（姫）オサコ　御裳待は　豊姫アヤコ　粕谷が女　イロノヱ・アサコ　南の御裳待　荷田がアヂコは　北の御裳待　筑波ハヤマが　ソガ姫は　東の御裳待ぞと　月に寄せ　御子は天日の　位宣る　日の山の名も　大山ぞ

解説文　　（赤文字は、原文の現在訳です。）

イサナギ、イサナミ（八十杵の妹）の二神はワカヒト（のちのアマテル神）の妃候補に、ゑ妃お捜してくれないかと勅りされました。タマキネ（のちのトヨケ神）の子であるカンミ（神宮）を仕切るカンミムスヒの八十杵が、諸神と議りて、北、東、南、西のスケ（典待）、ウチメ（内待妃）、オシモメ（御裳待）の十二人のお妃を次のように選ばれたのでした。

北

クラキネが　益姫モチコ　北の典待と

その妹女ハヤコ　小益姫　北の内待妃

（荷田がアヂコは　北の御裳待）

東

八十杵の　大宮（姫）ミチコ　東の典待と

棚機（姫）コタヱ　東の内待

（筑波ハヤマが　ソガ姫は　東の御裳待ぞ）

南

サクラウチが女　サクナタリ　瀬織津ホノコ　南の典待と

若姫ハナコ　南の内待

（粕谷が女　イロノヱ・アサコ　南の御裳待）

西

カナサキが女の　速開津（姫）アキコは潮の　八百アイコ　西の典待

内待は　宗像が　織機（姫）オサコ

御裳待は　豊姫アヤコ

粕谷が女　イロノヱ・アサコ　南の御裳待　荷田がアヂコは　北の御裳待　筑波ハヤマが　ソガ姫は　東の御裳待ぞと、十二人の妃を月に寄せられ、イサナギの御子のワカヒトは天日の嗣を引き継がれて、アマカミ（天神）の位に宣られるのでした。また、天日の嗣をされたワカヒトが生まれ、日の山の名を付与されたハラミ山も、大山と呼ばれる崇高な山となるぞ

６アヤ（紋）７（４行）～９（４行）【本文】

	ヲシテ	カナ文字	現在訳
		カレオオヤマト	故大ヤマト
		ヒタカミノ　ヤスクニノミヤ	日高見の　安国の宮
		キツサネノ　ツホネハカワリ	東西南北の　局は替り
		ミヤツカヱ　ソノナカヒトリ	宮仕ゑ　その中一人
		スナオナル　セオリツヒメノ	素直なる　瀬織津姫の
9		ミヤビニハ　キミモキサハシ	雅には　君も階（段）
		フミオリテ　アマサガルヒニ	踏み降りて　天下る日の
		ムカツヒメ　ツイニイレマス	ムカツ姫　遂に入れます
		ウチミヤニ	中宮に

語句の解説（辞書）

・オオヤマト

オオヤマトは、日高見にあったヤマトを指す。それに対しヤマトは、後の近畿地方に存在したヤマトを指す。

・セオリツ姫、ムカツ姫、ホノゴ

イサナギのトミ（臣）の五代のオオヤマスミの谷のサクラウチの娘であり、後にアマテル神との間に長子のオシヒト（箱根神）がいる。

【疑問】

「日高見の　安国の宮」と記述されているが、日高見以外に安国、安国の宮がありましたか。

【疑問に応える】

ホツマツタヱ、ミカサフミより「ヤスクニ」を検索しますと、５ヶ所と１ヶ所があります。そのホツマツタヱの５ヶ所の内の３ヶ所には、直接に「日高見」の安国の宮と記述されております。また、他に１ヶ所は文節より「日高見」が省略されておりました。また、重複しますが、３ヶ所中１ヶ所は「日高見安国の」国が省略されて「日高見安の」となっておりました。そして、残りの１ヶ所は、タヤスクニ→容易くにとなり、安国より意味が外れておりました。

ミカサフミの１ヶ所は、「コエ（国）」の安国の宮でした。

なお、余談ですが、安国の宮の場所があった「日高見」と「コヱ国」の歴史性を比較しますと、ミカサフミの記述よりホツマツタヱの記述が古い年代に記述されておりました。（下記の黄色行は、地名を表す。）

（抜粋）

奉呈文ー９

アサマツリ　アマネクトホリ
アマテラス　オヲンタカラノ
ヰモヤスク　ヤスクニミヤト　←　２８アヤ（綾）１６～１７より「ヒタカミ」が省略されていた。
タタヱマス　ヤヨロトシヘテ

６アヤ（綾）７～８

ソガヒメハ　キノオシモゾト
ツキニヨセ　ミコハアマヒノ
クラヰノル　ヒノヤマノナモ
オオヤマゾ　カレオオヤマト
ヒタカミノ　ヤスクニノミヤ
キツソネノ　ツホネハカワリ
ミヤツカヱ　ソノナカヒトリ
スナオナル　セオリツヒメノ

２３アヤ（綾）２３

オオトシノ　ミヅホヱルナリ
ヒカシラハ　ヒタカミヨリゾ
ヲサマリシ　ソノヤスクニノ
チヰモムラ　ミナカウヘアリ

２３アヤ（綾）２８

ツミセラル　カレガオゴリオ
タヤスクニ　ユルセバタミモ
ミナオゴル　コレヨリハタレ
アラハルル　タトエバカワノ

２８アヤ（綾）１６～１７

ヨウチメト　ヨオシモソヱテ
ツキノミヤ　セオリツヒメオ
ミキサキト　アメニオサメテ
オオヤマト　ヒタカミヤス（クニ）ノ
マツリコト　キコセハタミモ
オタヤカニ　フソヰヨロトシ
アメヒツギ　ミコノオシヒト
ユヅリウケ　モトノタカヒニ
↑
国が省略されている。

ミカサフミ・ハルミヤノアヤ

コシキミハ　コヱヤスクニノ　←コヱ国の国が省略されていた。
ミヤニマス　コシハソノカミ
トノミコト　モハカリヲサム
ミオホラニ　カミモトアケニ

原文の現在訳

故大ヤマト　日高見の　安国の宮　東西南北の　局は替り　宮仕ゑ　その中一人　素直なる　瀬織津姫の　雅には　君も階（段）　踏み降りて　天下る日の　ムカツ姫　遂に入れます　中宮に

解説文　　（赤文字は、原文の現在訳です。）

故（それゆえ）に大ヤマト国の日高見地方の安国の宮では、アマテル神の妃の十二人が東西南北の局に別れてお住まいになられ、その局の妃も様々に替りして宮仕ゑしておりました。その中のお一人である妃の中に、アマテル神を愛でる心で素直になられる妃がいて、その妃の中にアマテル神を信頼された瀬織津姫がおられました。その瀬織津姫の雅な振る舞いにアマテル神の御心も遂に動かれるは、アマテル神の君も階（段）を一歩一歩と踏み降りられて、天下る日のある晴れた日にムカツ姫を遂に后に迎え入れられます。それは、中宮になります。

６アヤ（紋）９（４行）～１０（４行）【本文】

ヲシテ		カナ文字		現在訳	
			カナヤマヒコガ		金山彦が
		ウリフヒメ	ナガコオスケニ	ウリフ姫	ナガコお典待に
		ソナヱシム	ミナハタオリテ	備ゑしむ	みな機織りて
		ミサホタツ	コレオコヨミノ	操立つ	これお暦の
		ウリフツキ		閏月	

語句の解説（辞書）

・金山彦

先祖の系統は不明。金山彦の娘にアマテル神の典待になったウリフ姫・ナガコ姫がいます。また、金山彦の孫娘に下照オクラ姫がいます。（10 アヤ（綾）18～19）

・機織

はたを織ること。はたおり。大辞林 第三版

・操

志を固めて変えないこと。…大辞林 第三版

原文の現在訳

金山彦が　ウリフ姫　ナガコお典待に　備ゑしむ　みな機織りて　操立つ　これお暦の　閏月

解説文　　（赤文字は、原文の現在訳です。）

更に、十二人のお妃以外にもう一人お妃がいました。そのお妃は暦で例えると閏月に位置する役目です。その役目に金山彦が子でウリフ姫に指名されたナガコお十二人のお妃の副典待に備ゑしむ（させる）。　その妃の十二人の面々は、みな機織りてアマテル神に仕え、妃としての操立つ。このナガコの役目のこれお暦の閏月と呼んだようです。

６アヤ（紋）１０（4 行）～１１（4 行）【本文】

	ヲシテ	カナ文字	現在訳	
		オトツキヨミハ		弟ツキヨミは
１１		ヒニツキテ　タミノマツリオ	日に次ぎて	民の政りお
		タスケシム　イヨノフタナノ	扶けしむ	伊予の二名の
		ヲサマラデ　ツキヨミヤレハ	治まらで	月読やれは
		イフキアケ　トノミヤニタス	イフキあげ	外の宮に治す

語句の解説（辞書）

・ツキヨミ

　アマテル神の次の弟。アマテル神と約５歳（紀元前３２５年頃、吉田説）違いの弟。イミ名は、モチキネ（月読神）である。生まれたのは、筑紫のオトタチハナのアワキ宮であり、モチキネと名付けられた。そして、アマテル神に次いで、民の政を扶けた。（５－６、３－１８）

　そんな折、「伊予の二名（伊予、阿波）の世が治まらない」との臣らの訴えがあった。そのため、アマテル神の名代として、約７歳～９歳になられた月読を急遽、伊予に派遣されることになった。伊予での政の宮は、天の原の外宮です。そして、月読は息吹きの勢いで活躍をされるや、伊予の国を治められた。（６－１１）

（ご参考）

兄弟の生まれ日の比較

・アマテル神の生まれ日は、紀元前 330 年 1 日 1 日

・弟の月読の神の生まれは、紀元前 325 年

・次の弟のハナキネ（ソサノオ）の生まれは、紀元前 321 年 3 月 21 日の日蝕日。

・イフキ

　天の原の外宮を治めていた頃の月読（モチキネ）の年齢が、約 22 歳～35 歳頃（紀元前 302 年～紀元前 289 年頃、吉田説）に、伊予の娘の伊予津姫を娶られて、モチタカを儲けられた。24 鈴の末期～25 鈴初期（紀元前 290 年頃、吉田説）にハタレの乱が発生し、イフキトらの活躍の甲斐があって、ハタレは征伐され、その功績によりモチタカは、アマテル神よりイフキヌシの称え名を賜っていた。(6-30)（８綾）

また、ハタレの乱の源になった「ネ」の益人らも討たし、ソサノオの罪が天晴れる頃にはイフキ神と呼ばれ、更に、伊勢の山田県を賜った時には阿波のイフキ神呼ばれた。(9-20、9-28)

【疑問】

　伊吹山とイフキ神の名は似ておりますが、ホツマツタヱにその由来が書いてあるでしょうか。

【疑問に応える】

　伊吹山と云えば、滋賀県米原市、岐阜県揖斐川町、関ケ原町にそびえる標高 1，377 米の山です。山頂は滋賀県米原市に位置します。だが、この山は「なぜに　伊吹山」と呼ばれるのかとの疑問が先に立ちます。

だが、ホツマツタヱには伊吹山の直接の記述はありませんが、この疑問を解いてくれそうなヒントの記述が、モチタカが神上がりされた後の生誕 97～114 年頃と生誕 177 年頃に残されておりました。そのヒントの一つ目は、事代主のツミハは

ハラの宮、飛鳥の宮、イフキの宮を訪ねており、過去に「伊予の伊吹の宮は、24 県をして治めていた。」と記述されておりました。また、二つ目はタケヒト（神武）の臣の高倉下が、各地を視察中に聞いた昔話として「イフキの臣が 32 県、24 県を征伐し治めた」と記述しておりました。そして、征伐の国の範囲に現在の伊吹山も含まれておりました。

このように、伊吹山の命名の元になったであろうかモチタカ（イフキ神）の活躍（ハタレの戦い）の伝説が各地に残されていたことは、イブキ神が慕われていたことの証明であり、伊吹山の命名もその恩恵の一部かと思われます。

原文の現在訳

弟ツキヨミは　日に次ぎて　民の政お　扶けしむ　伊予の二名の　治まらで　月読やれは　イフキあげ　外の宮に治す

解説文　　（赤文字は、原文の現在訳です。）

アマテル神には、約５歳（紀元前３２５年頃、吉田説）違いの弟がいる。その名は、モチキネ（月読神）である。生まれは、筑紫のオトタチハナのアワキ宮であり、モチキネと名付けられた。そして、弟ツキヨミ（モチキネ）は、日の神（アマテル神）に次ぎで、民の政お　扶けしむ。

そんな折、「伊予の二名（伊予、阿波）の世が治まら（ないの）で」との臣らの訴えがあった。そのため、アマテル神の名代として、約７歳～９歳になられた月読を急遽、伊予にやれは（派遣された。）伊予での政の宮は、天の原の外宮です。そして、月読は息吹きあげ（奮闘の勢い）で活躍をされるや、外の宮（伊予の国）に治す。

６アヤ（紋）１２（1 行）～１３（2 行）【本文】

	ヲシテ	カナ文字		現在訳	
		チタルクニ	マスヒトコクミ	千足国	益人コクミ
		オコタレハ	タマキネツゲテ	怠れは	タマキネ告げて
		ヒタカミハ	ヤソキネニタス	日高見は	八十杵に治す
		タマキネオ	キミノタスケト	タマキネお	君の扶けと
１３		タマキネハ	ユキテサホコノ	タマキネは	行きて細矛の
		クニオタス	ミヤツノミヤゾ	国お治す	宮津の宮ぞ

語句の解説（辞書）

コクミ

サシメの兄、ツの細矛・千足国の益人である。後に、「シラビト、コクミ事件」起こす。

シラビト、コクミ事件（８アヤ（綾）３～４）

ネ（北陸）の国と　細矛（島根）の国の　益人（地方の長官）が　内（サシメの同居人）のシラビト　コクミらが親（継子となったシラビトの義理の母のサシメ）も犯して　子（クラキネとサシメの子のクラ姫）も犯す

【シラヒト、コクミの人間関係】

識別　━　線は、兄弟を示す。

　　━　線は、夫婦を示す。

兄弟
- ココリ姫（姉）
- イサナギ　　継子→親子の関係にはあるが、血のつながっていない子
- クラギネ（弟、ネの益人）・・シラヒト（継子、ネの益人）

　　‖・・・・・・・クラコ姫（クラギネの死後、ツ（西）に送られる）

兄弟
- サシメ　（コクミの姉、クラキネの后、義母、クラギネの死後、ツ（西）に送られる）

　　‖　（政略結婚、コクミは、姉のサシメをわが妻にする悪行である。）
- コクミ　（サシメの兄、ツの細矛・千足国の益人、副）

原文の現在訳

千足国　益人コクミ　怠れは　タマキネ告げて　日高見は　八十杵に治す　タマキネお　君の扶けと　タマキネは　行きて細矛の　国お治す　宮津の宮ぞ

解説文　　（赤文字は、原文の現在訳です。）

千足国（島根）の益人（長官）のコクミ（トヨケ神の子のクラキネ、その妻の弟）が政務を怠れは、臣が日高見に上がり「千足国の政情が不安を申し上げ」れば、タマキネ（後のトヨウケ、豊受神）が国中に告げて、日高見（国）は八十杵（タマキネの長子）に治すこととすると申された。そして、タマキネ自らおアマテル神の君の扶けと任命して、自らタマキネは宮津に行きて細矛の国お治す。その政務の場所は、現在の京都府宮津市にあったと云われる宮津の宮ぞ

６アヤ（紋）１３（3 行）～１４（3 行）【本文】

ヲシテ		カナ文字		現在訳	
		ツキスミハ	シマツヒコヨリ	月隅は	シマツヒコより
		ナナヨスム	イマカナサキノ	七代住む	今カナサキの
		ヱタカバネ	ムナカタアツミ	支性	ムナカタ、アツミ
		タスケシム	ミヨモユタカニ	扶けしむ	御代も豊かに
		ヲサマリテ		治まりて	

原文の現在訳

月隅は　シマツヒコより　七代住む　今カナサキの　支性　ムナカタ、アツミ　扶けしむ　御代も豊かに　治まりて

解説文　　（赤文字は、原文の現在訳です。）

月隅（南九州）のトミ（臣）は、シマツヒコより七代住む。今のカナサキ（福岡県宗像市にある鐘崎漁港の地名がある。）のトミ（臣）の支性の子孫には、ムナカタ（宗像）、アツミ（安曇）の氏族があり、その一族は皆で扶けしむ。このためアマテル神のアマカミ（天神）の御代も豊かに治まりて。

６アヤ（紋）１４（3 行）～１８（4 行）【本文】

	ヲシテ	カナ文字		現在訳	
		ヤヨロトシヘテ		八万年経て	
	フソフスス	ヰモヰヱハツニ		二十二鈴	五百五枝初に
１５	ミヤツヨリ	ハヤキジトベハ		宮津より	急使飛べば
	アマヒカミ	イソギマナヰニ		天日神	急ぎ真名井に
	ミユキナル	トキニタマキネ		御幸なる	時にタマキネ
	アヒカタリ	ムカシミチノク		相語り	昔道奥
	ツクサネハ	ココニマツトテ		尽くさねは	ここに待つとて
	サツケマシ	モロカンタチモ		授けまし	諸神達も
	シカトキケ	キミハイクヨノ		しかと聞け	君は幾代の
	ミオヤノリ	コレトコタチノ		御祖なり	これ（国）常立の
１７	コトノリト	ホラオトサシテ		勅りと	洞お閉ざして
	カクレマス	ソノウエニタツ		隠れます	その上に建つ
	アサヒカミ	キミネンゴロニ		朝日神	君ねんごろに
	マツリシテ	ノチカエマサン		祀りして	のち帰まさん
	ミテクルマ	トトムルタミオ		御手車	留むる民お
	アワレミテ	ミツカラマツリ		憐れみて	自ら政り
	キコシメス	オモムキツケル		聞こしめす	趣告げる
	キギスニテ			使者にて	

語句の解説（辞書）

・八万年経て

　スス暦の暦法は、ホツマ・ヱトの１穂より成り立っており、６０穂で１枝（６０穂）、１０００枝（６００００穂）で１鈴と記述されております。すると八万年を穂で表すと８００００穂であり、鈴枝穂で表すと１鈴３３３枝と２０穂になります。そこで、８００００穂を現在の太陽暦に換算しますと、スス暦の１日は１６穂と解読できておりますので、１３年８ヶ月と８日になります。

　　（式）８００００÷１６＝５０００日・・・・１３年８ヶ月と８日

・二十二鈴　　五百五枝初

　二十二鈴　五百五枝初をスス暦の暦法で表すと、

　　（式）（２２－１）×６００００穂＋５０５×６０穂＋１穂＝１２９０３０１穂・・２２０年９ヶ月と１６日

・真名井

　真名井の朝日宮で、トヨケ、アマテル神が神上がりされたとホツマツタヱは記述している。「真名井にて　アマテル神は内ツ宮　トヨケは外宮」。また、呼び名としては、天の真名井、真名井、真名井の原の名がある。

・タマキネ

イミナをタマキネと云う。東の神と云われた日高見を治めていたタマキネは、天日嗣されたイサナギの妃を心配されていた。その時に、自分の子のヒサ子を嫁がせることを思いたたれや、次に、世継ぎ御子が生まれて来るようにと葛城山に禊された。禊も八千回に達する頃に、世継ぎの神になる男の子が生まれられた。その御子は、自らの名をウヒルギと申された。後のアマテル神である。タマキネは今の丹後半島の治安が疎かになると、宮津に出かけられ治められたのであった。そして、老いを感じられたタマキネは、天の真名井で神上がりされ、その後、朝日宮が造られて末永く祀られることになった。

【疑問】

現在では、ミチノクは「陸奥」と漢字表記されておりますが、ホツマツタヱの当時の意味は、どんな意味だったのでしょうか。

６アヤ(綾)のミチノクの事例　　「時にタマキネ　相語り　昔、ミチノク　尽くさねは」

【疑問に応える】

ホツマツタヱを見るとも15、23アヤ(綾)では秘伝の書を意味する「ミチノク」が記述され、39アヤ(綾)では人名・地域名を意味する「ミチノク」が記述されていた。この記述より6アヤ(綾)の「ミチノク」を、国常立から続く天成る道を極秘に記した天成書のミチノク(天成る道の奥義)の書と訳した。

ホツマツタヱより抜粋

６ー１５～１６４

アヒカタリ　ムカシミチノク　ツクサネハ

１５ー４３～４４

ミニコタエ　ココリノイモト　ムスバセテ　ヤマノミチノク　サツケマス

２３ー１５～１６

トノヲシエ　ナカクヲサマル　タカラナリ

アメノヒツギオ　ウクルヒノ　ミツノタカラノ　ソノヒトツ　アメナルフミノ　ミチノクソコレ

３９ー３８～３９

オオカシマヨリ　ミアヱナス　アシウラコエテ　ナコソバマ　カリミヤニマス

ヒタカミノ　ミチノク、シマツ　ミチヒコト　クニヅコ丰タリ

３９ー４１

ヒタカミノ　ミチノクニツグ　サオシカド　ミチノクカドニ　イデムカエ　ミチノクイワク

３９ー５５

コノトキニ　ミチノクオヨビ

３９－５６

ヤマトダケ　ミチノクユルシ　ナコソヨリ　キタハミチノク

３９－５９

ワシノハノ　トガリヤモモテ　タテマツル　ミチノクヨリハ

原文の現在訳

八万年経て　二十二鈴　　五百五枝初に　宮津より　急使飛べば　天日神　急ぎ真名井に　御幸なる　時にタマキネ　相語り　昔道奥　尽くさねは　ここに待つとて　授けまし　諸神達も　しかと聞け　君は幾代の　御祖なり　これ（国）常立の　勅りと　洞お閉ざして　隠れます　その上に建つ　朝日神　君ねんごろに　祀りして　のち帰まさん　御手車　留むる民お　憐れみて　自ら政り　聞こしめす　趣告げる　使者にて

解説文　（赤文字は、原文の現在訳です。）

話は、トヨケが宮津に赴任する前の日高見のことになります。その頃、日高見を治めていたトヨケは、東の君と呼ばれておりました。その日高見のトヨケの元に、「宮津に異変がある」と上京し報告するトミ（臣）がいました。そのため、日高見は八十杵に譲り任せて、トヨケ自ら細矛国の宮津に赴任されました。このことで、アマテル神のアマカミ（天神）の御代も豊かに治まり、トヨケの宮津滞在もスス暦の数えで八万年を経て、スス暦の二十二鈴　五百五枝初（紀元前316年）にもなっております。だが、健在だったトヨケも寄る歳波には勝てない日がやってきました。その異変に気付いたトミ（臣）は、宮津よりアマテル神の住まわれている「日のヤマト（ハラミ山）の原見宮」に急使を飛べば、天日神（アマテル神）は急ぎ真名井に御幸なさるる。

時にタマキネは、アマテル神と相語ります。そう云えば、「昔、日高見で天の日嗣を受くる日のことを講義しました。その時の講義は、三つの宝の内の二つの宝の書を授けました。だが、もう一つの宝の書はまだ授けておりませんでした。この三つの宝の書は、「トの教え」であり、天御祖神から長く引き継がれている宝の書なのです。そして、三つ目の宝の書は、天の日嗣お受くる日に学ぶもので、国常立から続く天成る道を極秘に記した天成書のミチノク（天成る道の奥義）（23-15～16）になります。」とご説明されました。そして、「この道奥の書を、今、アマテル神の君に授け尽くさねは、天成る道が閉ざされます。アマテル皇子がもう暫らくここに待つと云われても、私の余命が少なくなりましたので、今、授けましよう。」と、強く云われるや、諸神達にも「諸神達もしかと聞けよ。」と申されました。

トヨケは、皆が拝聴する中で静かに秘伝の道奥の書を開かれるや、国常立より伝わる天成る道を説かれ、「ここに居られますアマテル神を初め、アマカミ（天神）の君（天神）は幾代の神の御祖なり。これは天神の（国）常立からの勅りであるぞ」と申されたのであった。そして、三つ目の道奥の書の講義を終えられたトヨケは、自ら真名井ヶ原の洞お静かに閉ざして隠れられます。その洞の上に建つ朝日神（トヨケの神上がり名）の宮。アマテル神の君はトヨケの御霊をねんごろ（手厚く）にお祀りして、後に天に帰まさん（帰られることになるでしょう）。このトヨケとアマテル神の二人は、恰も、二人が向かい合ってそれぞれの両手を組み合わせ、その上に他の一人を乗せて、歩き回る遊戯の御手車を想像させられます。この二人のお姿を長く心に留むる民お憐れみて、アマテル神は自ら政りを行い、タミ（民）の声を聞こしめす。そして民の憐れみを癒す趣（方策）を告げられるや、使者にて。

６アヤ（紋）１８（4 行）～２３（1 行）【本文】

	ヲシテ		カナ文字		現在訳	
			ムカツヒメヨリ			ムカツ姫より
１９			コトノリシ	タカミニマツル	勅りし	（日）高見に祀る
			トヨケカミ	モチコノスケト	トヨケ神	モチコの典待と
			ハヤコウチ	アチコトミタリ	ハヤコ内待	アチコと三人
			ハヤユキテ	マナヰノハラノ	早行きて	真名井の原の
			ミヤツカヱ	コトノリアレハ	宮仕ゑ	勅りあれは
			カトテシテ	ミヤツノミヤニ	門出して	宮津の宮に
			アルトキニ	キミノミカリニ	在る時に	君の御狩に
			チタルクニ	ミチオサタメテ	千足国	道お定めて
２１			ヲサムノチ	ヤソキネノオト	治む後	八十杵の弟
			カンサヒオ	マスヒトトナシ	カンサヒお	益人となし
			マタオトゴ	ツハモノヌシト	また弟子	ツハモノヌシと
			コクミソエ	ツホネトトメテ	コクミ副え	局留めて
			カエラント	コソヨリムカフ	帰らんと	去年より向かふ
			ソサノオト	アマノミチネト	ソサノオと	アマノミチネと
			カドデナス	ネナトヤヨイノ	門出なす	ネナト弥生の
			モチヨリゾ	ウツキノモチニ	望よりぞ	ウ（４）月の望に
２３			カエリマス		帰ります	

原文の現在訳

ムカツ姫より　勅りし　（日）高見に祀る　トヨケ神　モチコの典待と　ハヤコ内待　アチコと三人　早行きて　真名井の原の　宮仕ゑ　勅りあれは　門出して　宮津の宮に　在る時に　君の御狩に　千足国　道お定めて　治む後　八十杵の弟　カンサヒお　益人となし　また弟子　ツハモノヌシと　コクミ副え　局留めて　帰らんと　去年より向かふ　ソサノオと　アマノミチネと　門出なす　ネナト弥生の　望よりぞ　ウ（４）月の望に　帰ります

解説文　（赤文字は、原文の現在訳です。）

アマテル神の妃であるムカツ姫（後のセオリツ姫）よりアマテル神の三人の妃に勅りされました。その勅りは「真名井の原で神上がりされて朝日の宮に祭られているトヨケ神を、現在の仙台地方に当たる（日）高見に祀ることであった。そのため、トヨケ神の御魂はモチコの典待とハヤコ内待、アチコと三人でお連れするようにとのご拝命を受けたのであった。三人は身支度を済ますや早行きて真名井の原の朝日宮に仕ゑられた。また、アマテル神よりトヨケ神の長子である八十杵に直接勅りあれはこそ、仙台地方の日高見より門出して丹後半島の宮津の宮に在る時に、八十杵は父であるトヨケ神の喪に服されながら宮津の宮を治められていました。ある時のことです。君の八十杵は御狩（野生の鳥や獣をとる行事）を楽しまれている最中において、真名井、宮津の宮を含めた千足国のことを深く考えになられました。そして、千足国を治められる方針・人事らの道（規則など）お定めになられて民に模範を示されたため、民も安らかに暮らせるようになり、やっと、千足国の治安も安定して治む後の頃です。八十杵の弟のカンサヒお益人（天の原より任命された地方の行政官）となされし。またオトゴ（弟子）ツハモノヌシ（兵主、春日殿、春日神の父）とコクミ（家柄不明）副えと、局（宮中に住む

女官）を留めて帰らん（帰るに違いない）と去年より宮津の宮に向かふ。また、ソサノオ（アマテル神の末の弟）とアマノミチネ（カンミムスヒのひ孫）と宮津の宮より門出なす。ネナト（ヱト番号・50）弥生の望（満月）よりぞ。ウ（４）月の望にまた、宮津の宮に帰ります。

６アヤ（紋）２３（１行）～２６（１行）【本文】

	ヲシテ	カナ文字	現在訳
２３		カエリマス　ヒノハヤヒコニ	ヒノハヤヒコに
		ミコトノリ　ナンヂクニヱオ	勅り　汝国絵お
		ウツスベシ　ヤマトメクリテ	写すべし　ヤマト巡りて
		ミナヱガク　キミハミヤコオ	みな描く　君は都お
		ウツサント　オモイカネシテ	遷さんと　オモイカネして
		ツクラシム　ナリテイサワニ	造らしむ　成りて伊雑に
		ミヤウツシ　ココニイマセハ	宮遷し　ここに居ませは
		ムカツヒメ　フヂオカアナノ	ムカツ姫　藤岡穴の
２５		オシホヰニ　ウブヤノミミニ	忍穂井に　産屋のミミに
		アレマセル　ヲシホミノミコ	生れませる　ヲシホミの皇子
		オシヒトト　イミナオフレテ	オシヒトと　イミ名お触れて
		カミアリノ　モチヰタマヱハ	神在りの　餅飯賜えは
		タミウタフ　サキニモチコガ	民歌ふ

原文の現在訳

ヒノハヤヒコに　勅り　汝国絵お　写すべし　ヤマト巡りて　みな描く　君は都お　遷さんと　オモイカネして　造らしむ　成りて伊雑に　宮遷し　ここに居ませは　ムカツ姫　藤岡穴の　忍穂井に　産屋のミミに　生れませる　ヲシホミの皇子　オシヒトと　イミ名お触れて　神在りの　餅飯賜えは　民歌ふ

解説文　　（赤文字は、原文の現在訳です。）

アマテル神が政務をされていた「ハラの都（天の原）」は、度々のハラミ山の噴火により一次退避を余儀なくされておりました。そのため、天の真名井より帰られたアマテル神は、一大決心されてヒノハヤヒコに勅りをされました。「汝、国中の建物の絵お　写すべし」。そこで、アマテル神の特命を拝命したヒノハヤヒコは、ヤマトの各地を巡りてみなみな描き、くわしい絵に解説文を付けてアマテル神に報告しました。それを受けられたアマテル神の君は都お遷さんと、オモイカネ（思兼、アチヒコ）に指示して、天の原の都を三重県の伊雑に造らしむ。間もなくして、都が成りて、伊雑にハラ宮遷し、ここにアマテル神、ムカツ姫の両神は安らかに居ませは、妃神のムカツ姫は後に妊まれて、藤岡穴（伊勢の外宮場内で、高倉山を構成する１山である藤岡山の山麓の穴）の忍穂井に造られた産屋のミミにて、皇子のヲシホミが生れませる。ヲシホミの幼名を賜った皇子は世継ぎ皇子である。そして、後に天日嗣される時の名のオシヒトと名付けられ、民にイミ名お触れて、ここにオシヒト神在りの祝いの行事に振舞われた餅飯を民が賜えは、民が一同に喜びて大いに歌ふのであった。

６アヤ（紋）２６（１行）～２９（１行）【本文】

	ヲシテ	カナ文字	現在訳
		サキニモチコガ	先にモチコが
		ウムミコハ　ホヒノミコトノ	生む皇子は　ホヒノミコトの
		タナヒトゾ　ハヤコガミツゴ	タナヒトぞ　ハヤコが三つ子
		ヒハタケコ　オキツシマヒメ	ーはタケコ　沖つ島姫
２７		フハタキコ　ヱツノシマヒメ	二はタキコ　江の島姫
		ミハタナゴ　イチキシマヒメ	三はタナゴ　市杵島姫
		シカルノチ　アキコガウメル	然るのち　アキコが生める
		タタギネハ　アマツヒコネゾ	タタギネは　アマツヒコネぞ
		シカルノチ　ミチコガウメル	然るのち　ミチコが生める
		バラギネハ　イキツヒコネゾ	バラギネは　イキツヒコネぞ
		トヨヒメハ　ネノウチメニテ	豊姫は　北の内待にて
		ヌカタダノ　クマノクシヒゾ	ヌカタタの　クマノクシヒぞ
２９		ミコスベテ　ヰオトミメナリ	皇子すべて　五男と三女なり

語句の解説（辞書）

・アマテル神の子

アマテル神の后は 12 人いるが、その内 6 人の妃に五男と三女（青色）の子がいる。

・モチコ　⇒　クラキネの子

（クラキネガ　マスヒメモチコ　ネノスケト）

タナヒト　⇒　モチコの子、別名ホヒノミコト

（サキニモチコガ　ウムミコハ　ホヒノミコトノ　タナヒトゾ）

・ホノコ　⇒　サクラウチが女

ヲシヒト　⇒　ホノコの子、別名ヲシホミ

・クラキネ　⇒　イサナギの弟

（イサナギハ　マツレトオトノ　クラキネハ）

・ハヤコ　⇒　クラキネの子

（ソノトメハヤコ　コマスヒメ）

ハヤコが三つ子

タケコ　⇒　沖つ島姫

タキコ　⇒　江の島姫

タナゴ　⇒　市杵島姫

・アキコ　⇒　カナサキの子

タタギネ　⇒　アキコの子、別名アマツヒコネ

（アキコガウメル　タタギネハ　アマツヒコネゾ）

・ミチコ　⇒　ヤソキネの子

（ネノウチキサキ　ヤソキネノ　オオミヤミチコ）

バラギネ　⇒　ミチコの子　別名イキツヒコネ

（ミチコガウメル　バラギネハ　イキツヒコネゾ）

・豊姫（アヤコ）⇒不明

ヌカタタ　⇒　アヤコの子　別名クマノクシヒ（熊野楠日命）

（ネノウチメニテ　ヌカタタのクマノクシヒ）

原文の現在訳

先にモチコが　生む皇子は　ホヒノミコトの　タナヒトぞ　ハヤコが三つ子　一はタケコ　沖つ島姫　二はタキコ　江の島姫　三はタナゴ　市杵島姫　然るのち　アキコが生める　タタギネは　アマツヒコネぞ　然るのち　ミチコが生める　バラギネは　イキツヒコネぞ　豊姫は　北の内待にて　ヌカタタの　クマノクシヒぞ　皇子すべて　五男と三女なり

解説文　　（赤文字は、原文の現在訳です。）

イサナギの子のクラキネには、二人の娘がいた。一人目はモチコ、二人目はハヤコです。その一人目のモチコは、ホノコがオシヒトを産む先（前）にクラキネの子のモチコが生む。その皇子の名は、ホヒノミコト（天穂日尊）のタナヒトぞ。また、クラキネの子でありモチコの妹のハヤコが産む子は三つ子です。一たり目のイミ名はタケコ、別名沖つ島姫。二たり目のイミ名はタキコ、別名江の島姫。三たり目のイミ名はタナゴ、別名市杵島姫になります。然る後「カナサキの子のアキコが生めるタタギネは、アマツヒコネ（天津彦根命）ぞ。然る後、ヤソキネの子のミチコが生めるバラギネは、イキツヒコネ（活津彦根命）ぞ。豊姫（アヤコ）は北の内待にて、ヌカタタのクマノクシヒ（熊野楠日命）ぞ。そして、イサナギ、イサナミの両神の皇子のすべてで、五男（タナヒト、ヲシヒト、タダキネ、バラキネ、ヌカタダの五人む）と三女（タケコ、タキコ、タナゴの三人）なります。

（ご参考）天照大神の三女神

まとめ表　　天照大神の三女神

三女	ホツマツタヱ		宗像大社			江ノ島神社	
一は	タケコ	沖つ島姫	沖ノ島	沖津宮	田心姫神	奥津宮	多紀理比賣命
二は	タキコ	江つの島姫	筑前大島	中津宮	湍津姫神	中津宮	市寸島比賣命
三は	タナゴ	市杵島姫	宗像市田島	辺津宮	市杵島姫神	辺津宮	田寸津比賣命

６アヤ（紋）２９（2 行）～３０（2 行）【本文】

ヲシテ	カナ文字	現在訳	
	サノトノニ　タチバナウヱテ	南の殿に	タチバナ植ゑて
	カグノミヤ　キニサクラウヱ	香久の宮	東に桜植ゑ
	ウオチミヤ　ミツカラマツリ	大内宮	自ら政り
	キコシメス　アマネクタミモ	聞こし召す	あまねく民も
	ユタカナリ	豊かなり	

語句の解説（辞書）

・ウオチミヤ

ウは大きい。オチの意味は落ちではないだろうから意味不明。

２８－２にオウチミヤがある。そのため、鏑邦夫氏は大内宮と訳していた。

・おお うち おほ― 【大内】

① 内裏。御所。皇居。大内山。

② 入り口が狭く、内の広いこと。「此は乃ち―なるかも／播磨国風土記」

③ 「大内雛」の略。「白酒の無い―は玉の汗／誹風柳多留 二三」

子項目 大内方・大内守護・大内人・大内雛・大内山

・アマネク 【▽遍く・▽普く・▼洽く】

（副）〔形容詞「あまねし」の連用形から〕

すべてに広く行き渡るさま。すみずみまで。漏れなく。「―知れ渡る」

原文の現在訳

南の殿に　タチバナ植ゑて　香久の宮　東に桜植ゑ　大内宮　自ら政り　聞こし召す　あまねく民も　豊かなり

解説文

アマテル神は伊雑の宮に遷られてから後に、南の殿にタチバナ植ゑられて香久の宮と名付けられ、また、東に桜植ゑられて大内宮と名付けられて、アマテル神自ら伊雑宮の政りをなされるや、アマカミ（天神）の勅りの声が全国のつづ浦々に聞こし召すようになって来ると、あまねく民も豊かになりました。

６アヤ（紋）３０（２行）～３２（４行）【本文】

			ツキヨミノツマ		月読の妻
		イヨツヒメ	ウムモチタカハ	伊予つ姫	生むモチタカは
		イフキヌシ	サキニタラチオ	イフキヌシ	先に父親
３１		ハナキネハ	ネノクニサホコ	ハナキネは	ネの国、細矛
		シラスベシ	イマダヒルコト	治らすべし	未だヒルコと
		ミクマノノ	トミガタスケテ	三熊野の	臣が扶けて
		ノチノキミ	ナチノワカミコ	後の君	那智の若王子
		ヌカタタヨ	イサナミマツル	ヌカタタよ	イサナミ祀る
		クマノカミ	シコメガシ卄オ	熊野神	醜女がシ卄お
		カラスカミ	マツレハクロキ	枯らす神	祀れは黒き
		トリムレテ	カラストナツク	鳥群れて	烏と名付く

語句の解説（辞書）

・タナチオ

タナチオ（父親）、タナチメ（母親）垂乳女、タラチ、タラチネ（両親）のこと。

・ヒルコ

昼子、後にアマテル神より和歌に優れた才能よりワカ姫の名を賜る。

・ミクマノ

みくまの【三熊野】、「熊野三山」に同じ。

・くまのさんざん　【熊野三山】

和歌山県田辺市の熊野坐神社（本宮）、熊野那智神社（那智）、新宮市の熊野速玉神社（新宮）の総称。

熊野三社。三熊野。熊野山。

・ヌカタタ

母は、アマテル神のお妃のあやこ、豊姫であり、父は九州の出身の宗像である。

イミ名はヌカタタの熊野クスヒと云う。

・クマノカミ

くまのじんじゃ【熊野神社】① 熊野三山を本宮として、全国に勧請された神社。② 島根県松江市八雲町にある神社。祭神は神祖熊野大神櫛御気野神（素戔嗚尊）。

・シコメ【▽醜女】

①　容貌のみにくい女。② 黄泉の国のみにくく、恐ろしい女の鬼。「即ちよもつ一を遣はして追はしめき／古事記 上」

・マツル

祀る 【祭る・▼祀る】 （動ラ五［四］）

① 飲食物などを供えたりして儀式を行い、神を招き、慰めたり祈願したりする。「神を―・る」「船霊を―・る」「皇太后の御体不予したまふ、天神地祇を―・る／続日本紀 天平宝字四」

②神としてあがめ、一定の場所に安置する。「戦死者の霊を―・った神社」

② あがめて上位にすえる。まつりあげる。「隠居は城井の一間に―・られて／二人女房 紅葉」可能 まつれる

・シ丰お枯らす神

古代には、ミイラ、即身神を作る神がいたとも推測つれる。

・カラス

鳥のカラスの呼び名は、ホツマ董事りあった。そのホツマの解説は絶品である。

「醜女がシ丰お　枯らす神　祀れは黒き　鳥群れて　烏と名付く」

原文の現在訳

月読の妻　伊予つ姫　生むモチタカは　イフキヌシ　先に父親　ハナキネは　ネの国、細矛　治らすべし　未だヒルコと　三熊野の　　臣が扶けて　後の君　那智の若王子　ヌカタタよ　イサナミ祀る　熊野神　醜女がシ丰お　枯らす神　祀れは黒き　鳥群れて　烏と名付く

解説文

イサナギの二男の月読（モチキネ）は、四国の伊予に赴任されて妻を娶られるや、その妻の名は伊予つ姫と云う。その伊予つ姫が生む皇子のイミ名はモチタカと云う。そのモチタカは、後のイフキヌシ（伊吹主）と云った。先に月読（モチキネ）の父親であるハナキネ（花杵、ソサノオ）は、ネの国（鳥取～富山付近にあった国）の細矛（現在の鳥取県）の治（乱れや騒ぎを静ま）らすべし。未だヒルコ（昼子、ワカ姫）と三熊野（熊野三山）の臣が扶けて、後の君になられる那智（熊野那智神社）の若王子の熊野クスヒは、ヌカタタよ。そのクスヒはイサナミを祀る三熊野（熊野三山）の熊野神と崇められた。また、古代には葬式を執り行う女がいてこれを醜女と云い、その醜女（容貌のみにくい女）がシ丰お枯らすしミイラの一種の即身神を作る神であった。だが、即身神になったイサナミを祀れは、頭上に黒き鳥群れており、そのため、黒き鳥をホツマの昔から烏（カラス）と名付くなり。

６アヤ（紋）３３（1 行）～３６（3 行）【本文】

３３		イサナギハ	アツシレタマフ	イサナギは	篤しれ給ふ
		ココオモテ	アワチノミヤニ	ここおもて	淡路の宮に
		カクレマス	コトハオワレト	隠れます	事は終われと
		イキオヒハ	アメニノホリテ	勢ひは	天に昇りて
		オオカヱス	アヒワカミヤニ	オお返す	天日若宮に
		トトマリテ	ヤミオタシマス	留まりて	闇お治します
		タガノカミ	ヤマトヤスミヤ	多賀の神	ヤマト安宮
		ヒキウツシ	アメヤスガワノ	引き遷し	天安河の
３５		ヒルコヒメ	ミコオシヒトオ	ヒルコ姫	皇子オシヒトお
		ヒタシマス	ネトサホコクニ	養します	ネと細矛国
		カネヲサム	シタテルヒメト	兼ねて治む	下照姫と
		アチヒコト	イセオムスヒテ	アチヒコと	伊勢を結ひて
		モロトモニ	ココニヲサメテ	諸共に	ここに治めて
		ウムミコハ	イムナシツヒコ	生む御子は	イム名シツヒコ
		タチカラオカナ		タチカラオかな	

語句の解説（辞書）

・アツシレ

あつし 【▽篤し】 （形シク）〔「あづし」とも〕病気が重い。 あつし・る 【▽篤しる】（動ラ下二）病気が重くなる。

ホツマの訳としては、「イサナギは 篤しれ給ふ」⇒「イサナギは 篤しれ（病気が重い）給ふ」⇒「イサナギは重い病気になられた。」とする方がベーター。

・タマフ

たま・う たまふ 【▽給う】 （動ワ五［ハ四］）〔古語の動詞「たまふ（賜・給）」の現代での用法〕動詞の連用形に付いて、補助動詞として用いられる。男性が同輩または同輩以下の人に対して、軽い敬意または親しみの気持ちをこめていう。命令形「たまえ」の形で命令の意を表すのに多く用いられるが、命令形以外の形もまれには用いられる。「まあ入り―・え」「これを見―・え」「おい、よし―・え」「あまり悲しみ―・うな」→たまう（動ハ四）

・オモテ ここおもて

おもて 【表】 ① 二つの面のうち、前や上になる方。

・モテ ここおもて

もて （接頭）〔連語「もて（以）」から〕動詞に付いて、意味を強めたり語調を整えたりするのに用いる。

・コト

こと き・れる 【事切れる】 （動ラ下一）文 ラ下二 ことき・る

① 生命が絶える。死ぬ。② 事が終わる。きまりがついて終わる。

・イキオヒ

いきおい、いきほひ 【勢い】 ー （名）

① 運動によって生じる他を圧するような力。② 元気。威勢。③ 権力。勢力。④ はずみ。なりゆき。

・タガ

たが 【多賀】 滋賀県中東部、犬上郡の町。鈴鹿山脈の西麓にある。多賀大社（祭神：イサナギ）の鳥居前町に発展。

・ヤミ

やみ 【闇】

① 暗い状態。光のささない状態。また、その所。「一に紛れる」

光のささない状態⇒イサナミが神上がりされた世界、または、あの世と訳した。

【疑問】

【疑問に応える】

原文の現在訳

イサナギは　篤しれ給ふ　ここおもて　淡路の宮に　隠れます　事は終われと　勢ひは　天に昇りて　オお返す　天日若宮に　留まりて　闇お治します　多賀の神　ヤマト安宮　引き遷し　天安河の　ヒルコ姫　皇子オシヒトお　養します　ネと細矛国　兼ねて治む　下照姫と　アチヒコと　伊勢を結ひて　諸共に　ここに治めて　生む御子は　イム名シツヒコ　タチカラオかな

解説文

イサナギは、重い病気になられた（あつしれ給ふ）のでした。そして、自らの寿命を悟られたイサナギは、国の最も中心となるここおもての淡路の宮に隠れられます。そして、日の神の聖を受けらていたイサナギは、自らの事（生命）は終われどと、己の魂の勢ひ（元気）は天に昇りて、魂の生みの親である天日の神に日のオ（尾）おお返しになられたのです。そして、自らの意思で天日の若宮に留まりて、闇（イサナミが神上がりされた世界、あの世）お治しますイサナギの多賀の神。そして、今までイサナギが治められていたヤマト安宮をアチヒコは引き遷し、天安河（滋賀県の野洲）のヒルコ姫（後のワカ姫のこと）と共に皇子オシヒトお養します。また、ネ（北陸地方）と細矛国も兼ねて治む下照姫（ヒルコ姫、ワカ姫のこと）とアチヒコ（阿智彦）と夫婦の契である伊勢を結ひて、諸共に、ここ天安河に治めて和みます。また、ヒルコ姫が生む御子は、のちに天岩戸で活躍されるイム名シツヒコのタチカラオかな。

（おわり）